

五島列島の旅 2020

旅のチカラ研究所

2020年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

長崎県、五島列島は大変興味をひかれる場所で、この地方の歴史文化を訪ねて夫婦で訪れた。大きな島だけでも5つ、他にもたくさん島があって交通の便はあまりよくないので効率的に回るためにパックツアーを利用した。歴史の流れに沿って各地を紹介したい。

第一章 下五島

■五島列島で最も大きい福江島

私たち夫婦が参加したツアー一行は長崎港からジェット船に乗って五島列島の中で最も大きい福江島にやって来た。乗船時間は約1時間半、そんなに遠くはない。



<五島列島>

五島列島は長崎県の西の沖合にあり、比較的大きな5つの島を中心として約200の島々があり、福江島を含めて南にある3島は五島市に属し、北にある2島は新上五島町に属している。地元では南の3島を下五島、北の2島を上五島と呼んでいる。

福江港で待っていた大型バスに乗り込む。ベテランの男性現地ガイドが付いてくれた。彼の名は上河さんで、この福江島生まれで地元の小学校に勤めていたということで、現役を引退して福江島を紹介する仕事をしている。

彼が現れて私は少し安心した。と言うのも空港から同行してくれている添乗員は実に頼りない。

「何か分からないことがありますか？」と言うので、ツアー参加者の誰かが「○日目の夕食はどうなるのですか？」と聞くと、彼は「夕食は全部付いていますよ」と言う。ところが行程表を見るとそんなことはなく、慌ててスケジュールを確認する始末だ。

ここに来るまでも一応の説明をしてくれるが、スマホの画面を丸読みしているだけだ。

福江島の最初の訪問地、南東部にある「鎧瀬溶岩海岸」にやって来た。福江島の周りにはいくつかの小島があるが、この海岸から見える赤島、黄島、黒島は全て有人島だ。有人島といっても住民は極めて少ない。一番人口の少ない黒島は昨年までは2人、今年から1人になったという。母娘が2人暮らしをしていたが90代の母親が他界し、70代の娘だけになってしまったとガイドは教えてくれる。これが小さな島の現実なのだと改めて感じた。それでも沖合約7kmに浮かぶその黒島にも週一便の定期船が出ている。

鎧瀬溶岩海岸のから北側には「鬼岳」という標高315mの山がある。山といっても中腹までは車で行けて、全体が野焼きされた綺麗な山肌をしており名前から想像するような険しい山ではない。

頂上の一步手前が広場になっており、この広場は島民の憩いの場、デートスポット、さらにはイベント会場にもなっている。夜にはここから綺麗に星が見えるらしく天文台もある。星を見るための椅子が30脚くらい置いてある。ツアー客たちは椅子に座って休憩がてら上を眺めているが、まだ日も沈んでいない。それでも海岸線、隣の山の上にあるゴルフ場、飛行場、住宅地、そして私たちが泊まるホテルまで見える。



< 鬼岳からの景色 天文台 ゴルフ場 >

■コンカナ王国

鬼岳から見ていたホテルにチェックインする。「コンカナ王国」という珍しい名前のリゾートホテルだ。コンカナとは「来んかな、来てください」という意味らしい。

かつて牧場だったという広い敷地は一大リゾート施設になっている。中央の芝生の広場を囲んでチャペル、プール、池もあって、何故かマーライオンまで置かれている。このマーライオンはアジア太平洋博覧会に出展したものを移設したと書いてある。その横にコテージ、温泉棟、レストラン、さらにワイナリーまである。

ワイナリーでは五島ワインを造っている。試飲させてくれるというので夕食前にワイナリーの見学に行く。小さなワイナリーなので手作り感があって期待できそうだ。出迎えてくれたのはニュージーランド人で、ワイン造りの指導に来たのだろうか、片言の日本語を交えて英語で説明してくれる。

説明の後に私は「この島でブドウを栽培しているのですか？」と質問すると、彼は「ここでも栽培していますが、九州各地や山梨県からも持って来ている」と答えてくれた。

試飲は五島産のブドウを使ったものを中心に飲んだが、結構いける。



<コンカナ王国 プール>



<コンカナ王国 五島ワイナリー>

夕食は敷地内のレストランになる。驚くほどおしゃれな雰囲気、失礼ながら五島列島のイメージとは合っていない。いやワイナリー見学の後に、和食それも田舎料理が出てきては興ざめなので、当たり前かもしれない。五島牛を筆頭に海の幸など地元の食材を使った料理、そして〆の五島うどんなど素晴らしい。もちろん味もなかなかいける。

ワインはひとり一杯まで無料で飲むことができるから、これもまた嬉しいサービスで私の評価はアップするばかりだ。

食休みをしてから温泉を堪能する。大浴場には本格的な露天風呂も付いている。泉質は茶褐色でややしょっぱい、高張性なので温泉濃度が高い。五島列島は火山でできた島なので当然かもしれないが、正直言ってこのような温泉を体験出来るとは思わなかった。実にありがたい。

部屋はコテージで広い。ダブルベッドが2つ置かれていて小奇麗になっている。全体的には新しいように見えるが水道の蛇口を見るとそんなに新しくない施設のようだ。

それは水道の蛇口はレバーを下げると水が出るタイプを使っているからで、25年以上は経っている。1995年に発生した阪神淡路大震災で上から物が落ちてきて水道の蛇口のレバーを上から押して水が出っぱなしになったことが多く発生したので、以来はレバーを下げると水が止まるタイプに変更されているからだ。

■福江島を巡る

五島列島は餌や気候の関係で生息する鳥の種類が多いという。カラスにも住み易いようで、カラスは日本で7種類いるというが、そのうち4種類がここで見ることができる。

鳥も魚もオスの方が綺麗だとガイドは説明してくれる。カラスが綺麗だとか言われても良く分からないが、孔雀などを見るとそうなのだろう。オスは自分をアピールするために綺麗になっていく。主導権はメスにあるのが自然の摂理なのだろう。

ここは魚も多く釣れる。メスが釣られるとオスはいつまでも周りを回って待っているが、その逆にオスが釣られてもメスは直ぐに離れるという。この話をガイドが紹介すると、バスの中は爆笑だ。おばさんたちは良く分かっている。

福江島の西の端にある「井持浦教会ルルド」にやって来る。

この聞きなれないルルドとは何か。添乗員に聞いたが、ルルドはルルドだと言っている。やはり頼りにならない。

ガイドに聞くとルルドはフランスの巡礼の町の名で、その町にある洞窟内の泉が病気治療に効くといわれて有名になった。ここ井持浦教会も1899年に日本で最初にルルドを名乗って、この霊水を飲むと病が治るといわれ日本全国から信者が来るという。

ツアー客の多くは水を買って求めている。いや、湧き水は有料にできないからペットボトルを販売している。そのペットボトルに湧き水を入れて持ち帰っているが、一人で何本も持ち帰るツアー客もいる。

旅行は始まったばかりなのにペットボトルを何本も大変だが、この人たちは敬けんなキリスト教徒なのだろう。



<井持浦教会の湧き水>

井持浦教会は半島にあつて、その半島が玉之浦という大きな入り江をつくっている。ここは自然の良港で、半島に突き出た大瀬崎灯台近くの高台から見た玉之浦は長崎の九十九島のように入り組んだ入り江と小島が絶景を作っている。

ガイドの話ではかつて伊藤博文がこの入り江に軍港を作るために視察に来たという。福江島の西の端にあるので日本列島でもほぼ西の端で東シナ海を臨んで、朝鮮半島にも中国にも簡単に出て行ける。結果として軍港は広島県の呉になったが、もしここに造られていればこの景色は今と全く異なっていただろう。

軍港にならなかったのが今のはのんびりとしたもので、近年になって離島暮らしにあこがれて移住してきた親子 2 代の家もある。大きな家が海に面して建っている。実に素晴らしい環境にある家で、とても個人の家に見えない。



<玉之浦全景>



<玉之浦の移住者の家>

三井楽地区の「高浜海水浴場」にやって来た。ここは日経新聞社のアンケートで、日本で一番綺麗な浜になったという場所だ。

実は同じ三井楽地区にある「白良ヶ浜海水浴場」に、私は 40 年前にやってきていた。その浜も当時のキャッチコピーでは日本で一番綺麗な浜辺といわれていた。

それ程この一帯は砂浜と海が綺麗な場所なのだが、残念ながら今日は太陽が出ていないので写真写りはイマイチだ。

高浜の沖合にある「嵯峨ノ島」がガイドお勧めの島だという。火山で出来た島で、漁場に恵まれており、釣客が多く訪れる。この島に伝わる「オーモンデー」という踊りは日本国内のどこにも類を見ない異色の念仏踊りだという。再訪することがあれば是非行ってみたい。

■遣唐使の島

福江島は、その昔は遣唐使が唐（中国）に渡るために最後に船出を待つ島で、その風待ちの入江がある。てっきり私は壱岐・対馬を経由して朝鮮半島から行っていたのだと思っていたが、そうではないらしい。

遣唐使は 630 年から 838 年まで日本から唐に派遣された。いわば国家的海外留学制度だった。そのルートは当初は壱岐・対馬から朝鮮半島に渡り陸路に行くものだったが、663 年の白村江の戦いで百済と日本の連合軍が新羅に敗れて陸路が使えなくなった。それで東シナ海を渡るという危険なルートをとらざるを得なくなった。そのために当時の遣唐使の生還率は 6 割だったというから、命を落とした優秀な若者が多数いたに違いない。

遣唐使の中には有名な空海も最澄もいた。空海は 774 年生まれ、30 才で遣唐使として唐に渡り 2 年で帰国した。通常の留学期間は 20 年で、それは 20 年に一度船が出るので 20 年間戻れない。しかし空海は 2 年で帰国した。理由は分からない。一般人が 20 年かかることを 2 年でできてしまうほどの天才だったのか、唐に得るべきものがなかったのか、あるいは 20 年後の 50 才で帰国しても当時の人間の寿命から日本で布教活動はできないというライフプランを考えての行動だったのかもしれない。

その遣唐使の名前が付いた「遣唐使ふるさと館」という道の駅で昼食になった。

中に入ると天井が面白い形をしている。遣唐使船の船底を再現しているという。そのこだわり度合いが伝わってくる。

船底の大きさは横幅約 8m、長さ約 30m でそれなりのサイズではあるが、これで東シナ海を渡るには勇気がいるだろう。



<遣唐使ふるさと館の天井>

昼食には今が旬のアオリイカの刺身が付いた。日本の都道府県で長崎県は北海道に次いで漁獲量が多いという。その長崎県といってもほとんどは五島列島近海が漁場になっている。

五島列島では一年中魚が獲れて、旬の魚もバラエティに富んでいる。五島市の「五島さかなまつり実行委員会」の選だという月毎の旬の魚をガイドが全て教えてくれた。

1月はクロマグロ、2月はタチウオ、3月はイセエビ、4月はマダイ、5月はマアジ、6月はイサキ、7月はハガツオ、8月はアワビ、9月はトビウオ、10月はウチワエビ、11月はアオリイカ、12月はクエだという。

実は私もインターネットで調べてみたが、半分以上違う魚が出てきた。ということはそれほど魚の種類が豊富で漁獲量も多いということを意味している。五島の魚、恐るべき。

これでは日本各地から移住者が来てもおかしくない。

■久賀島（ひさかじま）

下五島の残りの 2 島に行くために私たちは再び福江港に戻り、海上タクシーに乗る。もちろんチャーターなので私たちツアー客専用になっている。タクシーといっても 50 人乗りの大きな船で、ちなみにチャーターしなければ一人当たりの乗船費用は 12000 円と看板に書かれている。

五島列島は隠れキリシタンあるいは潜伏キリシタンで有名だが、今でもキリスト教の信者が多い。長崎教区の信者数は約 6 万人で東京教区の約 9 万人に次ぐ 2 番目だが、人口に占める割合は東京教区の 10 倍になる。そしてこの五島列島、それも北に行くほど信者が多く集中している。

海上タクシーに乗って女性ガイドに代わる。彼女はキリスト教信者、つまりキリシタンだという。

久賀島の五輪地区に船が着いた。この五輪地区には 4 人の住民が住んでいる。2 組の兄弟の夫婦で、この地区を守っている。もちろんキリシタンだ。

この地区にある「旧五輪教会」が私たちの目的施設で、木造で実に興味深い造りをした教会だ。



<旧五輪教会>

この教会に旧の字が付いている理由は、この教会は現役の教会ではなく今は教会として使われていない。隣に現役の教会があつて、そちらは入ることが許されいが、こちらの旧教会は観光施設になっているので写真撮影も可能で観光客にとってはありがたい。

1881 年に久賀島の別の地区に建てられた島内最初の教会を 1930 年にそのまま移築したものだ。だから築年数は 140 年余り経っている。

日本に教会建築についての情報や技術がなかった頃のものなので面白い造りになっている。窓の開閉は観音開きではなく引き戸になっている。さらに窓に雨戸があつて、その戸袋もある。アーチ状の梁、柱のない室内を見事に造っている。ガイドの話では船大工が造ったというから、なるほどと納得する。



<旧五輪教会内部>



<旧五輪教会 引き戸の窓>

■世界遺産登録

旧五輪教会のある集落は、世界遺産「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」として2018年ユネスコの世界遺産に登録された。潜伏キリシタンという聞きなれない言葉で登録されたが、当時の報道で隠れキリシタンとどう違うのかで話題になった。

江戸時代のキリスト教禁教令下でキリスト教を信仰した人たちを隠れキリシタンと呼んだが、隠れて信仰するので仏教徒を装うなどの工夫をしたために本来の信仰スタイルから変化してしまった。明治になって禁教令が解かれてもカトリック教会に戻らずに隠れていた信仰スタイルをそのまま守り通した信者もいた。そして今もいる。

世界遺産に申請するにあたり、カトリック教会に戻った信者たちを潜伏キリシタンと呼び、そのままの信仰スタイルを変えない信者を隠れキリシタンと呼び、区別した。そして潜伏キリシタンの施設だけを選び世界遺産登録になった。それは恐らく外圧によって独自に進化した宗派というのは世界中に多くあるが、外圧が無くなった時に元に戻るという点を高く評価したのだろう。約260年もの長き間の信仰スタイルを捨てるのは容易ではなかっただろう。

ついでに私事で恐縮だが、最近私は世界遺産検定2級を受験し合格した。従って世界遺産についての一応の知識を身に着けた。

この「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」は申請当初は隠れキリシタンも入っていた。ところがこの申請を途中からイコモス（国際記念物遺跡会議）という国際機関にアドバイザーをお願いした。すると隠れキリシタンを外して、新たに潜伏キリシタンという言葉を使った。その結果、ストーリーが明確化されて申請が通って登録になった。

イコモスはよく耳にする機関だが、ユネスコから事前調査・現地調査を委託されている機関なので、世界遺産登録のノウハウを知り尽くしている。

そのストーリーとは、潜伏キリシタンの時代を分かり易く4つに分けたことだ。

「1、始まり」はキリスト教伝来から天草四郎の島原の乱でキリスト教が禁止された時代。

「2、形成」は信徒が神道や仏教徒を装いながらも信仰方法を作り上げていった時代。

「3、維持・拡大」は信仰を続けるために、より信仰を隠すことができる五島列島の島々に移住していった時代。

「4、変容・終わり」で250年ぶりに信仰を公にして信徒発見からカトリックに戻って教会が築かれていく時代。

何事も見せ方かもしれない。いや、何を伝えたいか、何を大事にしたいかということを確認にすることだろう。イコモスはキリスト教カトリックの信仰は普遍のものだということを知ることが出来たのだらう。

■ 奈留島

船から奈留島が見えてきて、少し高台には県立奈留高校がある。ガイドがその高校について話してくれる。

1974年に女子生徒が校歌を作ってほしいとラジオの深夜放送に投書した。当時は奈留高校ではなく県立五島高校の分校だったので五島高校の校歌がそのまま校歌となっていた。その歌詞は本校から離れた奈留島にある分校の生徒にとっては全くなじみがなかった。

その希望が叶って荒井由実作詞・作曲による「瞳を閉じて」が贈られた。分校が独立して奈留高校になったが、残念ながら校歌にはならなかった。

奈留島の江上地区に上陸する。

この地区は民家もそれなりに多い。というのは2009年3月まで小学校があったということからも分かる。現在は校舎こそないが校庭はそのまま残っている。

江上天主堂はその小学校の直ぐ近くにあつて、白と青のペンキで塗られたお洒落な教会になっている。

この地域と教会はもちろん世界遺産に登録されている。



< 江上小学校の跡地と江上天主堂 >

第二章 上五島

■ 上五島はキリシタンの島

上五島にやって来た。正式には新上五島町で中通島と若松島の2島が主な島になっている。

上五島には教会が29、神社が58、寺が13ある。五島列島全体の人口は約7万人、新上五島町の人口は2万人足らずなのに29の教会は明らかに多い。長崎県でも五島列島、その中でも上五島は僻地で、そこにキリスト教徒つまりキリシタンが多い。

ユネスコの世界遺産登録の4つの時代の中で、「3、維持・拡大」の中で“維持”はわかるが“拡大”というのが、どうも私には違和感があった。それはキリスト教禁止令が出た後なので、逃げ隠れているのに拡大とは不思議だからだ。

拡大した理由は、五島列島の中でも僻地の島に移住が進んだため、その背景には福江藩や平戸藩が五島列島の離島の開拓をしたいという目的があった。そのために信仰を黙認して移住政策を進めた。開拓した僻地の島とは上五島の島々や先ほどまで巡ってきた久賀島や奈留島になる。

■若松島

若松港に着く前に海上から「ここが隠れキリシタンの集落」だとガイドが教えてくれる。隠れキリシタンはカトリック教会に戻らずにそのまま変容した信仰を続けた人たちで、今でもそのまま続けているという。

若松港に入港し海上タクシーを降りて、大型バスに乗り換える。ここでガイドがまた地元の人に代わった。新しいガイドは自ら「高齢者 AKB」を名乗る楽しい女性で、とても高齢者には見えない。彼女はマチュピチュやインカ帝国が好きで世界一周クルーズに乗りたいたと言っていたので、それならば旅行記を読んでもらうと言って私の名刺を渡した。

その返礼ではないだろうが、この町のために長崎出身の歌手さだまさしが作ってくれた町の唄をうたってくれた。

若松大橋という立派な橋があって中通島に渡る。橋の上はビューポイントになっており、ツアー客たちが写真を撮っていると、乗ってきた海上タクシーが福江島へ帰っていく。皆は、「ありがとうー」と大きな声を出して手を振っている。

■宿と食事

夕食は仲通島の割烹料理屋で鯨料理が出てくる。この地域は鯨を食すという食習慣が昔からあると福江島のガイドが言っていたことを思い出す。地元では鯨の小さいものがイルカだというような区別だとも言っていた。だとするとイルカも食べていたのだろう。

泊まった「ホテルアオカ」は新しい、そしてお洒落な造りをしている。バス、トイレは別の個室になっており、洗面台はベッドルーム兼リビングのテレビの隣にある。この構造はかなり斬新だと私が感激していると、妻は洗面台の周りは水が跳ねるので「もう、ひと工夫ね」と手厳しい。

朝食はブッフエスタイルの洋食かと思いきや、面白いお茶漬けセットが出てきた。大きな魚の切り身と透明なお洒落な急須に入った出汁があるので自分でお茶漬けを作る。

上五島と言えば飛魚出汁（あごだし）が有名なので、出汁も魚もどちらもトビウオに違いない。もちろんいい味を出していた。



<朝食のお茶漬けセット>

■中通島

キリスト教信者の多い中通島は偶然にも十字架の形をしている。十字架で例えると縦の棒の上の中間程の場所にある「矢堅目（やがため）の塩」という製塩所にやって来る。

ここでは製塩の実演販売をしている。海水を煮たてて作る塩で、約 2 週間で袋詰めまで完結するという。4 トンの海水から 40kg の塩が作られるというが、材料費はタダだ。

この実演を少し見せてもらった。材料費はタダでもかなりの手間がかかっていることに驚く。出来上がりの塩はキラキラ輝いていてサラサラしている。試食をさせてもらおうとその食感も味わいも良かったので、ついつい塩をたくさん買い込んでしまった。GoTo トラベルキャンペーン（以下 GOTO）の地域クーポンが使えるので、皆もたくさん買い込んでいます。

矢堅目の近くの入り江にたたずむ「青砂ヶ浦教会」はレンガと瓦屋根の教会で、正面には大天使ミカエルが立っている。趣のある教会で、中に入るとステンドグラスがとても奇麗で独特の雰囲気がある。こういう教会が地域に密着して普通にあるのが、上五島の特徴だろう。

■頭ヶ島（かしらがしま）

十字架の中通島の横の棒の東端にある頭ヶ島は幕末までは無人島だった。その後迫害から逃れて移住してきたキリシタンが住み着き、最初は木造の教会ができて、1919 年に現在の石造りの「頭ヶ島教会」ができた。石は近くの島から切り出して信者らが船で運び、組み立てたもので、とても重厚な外観をしている。

頭ヶ島教会は砂岩で出来た威風堂々とした教会だ。残念ながら中に入ることはできなかったが、外から窓越しに中を覗くことができ、明るい教会になっている。



<頭ヶ島教会>

この地区には教会を中心にいくつかの民家があり、そして墓もある。墓は日本式の四角い石塔の上に十字架を乗せた形をしており、潜伏していた時代にできた墓を禁教令が解かれてキリスト教徒を名乗れるようになったので十字架を乗せたという。墓はかなりの数あるが、現在の島の人口は7人だという。

この集落も世界遺産になっている。



<頭ヶ島教会の前にある墓地 石塔の上に十字架がある>

■五島うどん

昼は十字架の真ん中付近にあたる有川港にある五島うどんの専門店に入った。この地域が五島うどん発祥の地になっているという。

ここでは「地獄炊き」という食べ方が用意されている。沸騰して煮えたぎった鍋の中にうどんを入れ、湯がいて食べるので、この煮えたぎった鍋を地獄に例えている。五島うどんは腰が強いのが特徴で時間がかかる。珍しかったのは“とき卵”で食べることで、もちろん飛魚出汁（あごだし）も用意されており、どちらも美味しい。私は急に五島うどん、それも地獄炊きのファンになってしまった。

この五島うどんの腰の強さと美味しさの秘密は麺に椿油が混ぜてあるという。五島列島は椿が多く生息するので椿油などの土産物も多い。

有川港から高速船に乗り長崎港に向かう。この船は速いのでジェット船かと思ったが浮上しない普通の船だ。力まかせに進んでいる感じで時速50km以上出ている。船内は綺麗でゆったりしており、窓はステンドグラスをあしらっている。

第三章 長崎市、他

■中華街

長崎市の「長崎新地中華街」に来た。ここはそれなりに大きな中華街で、横浜の中華街よりも小さいが神戸の中華街よりも大きな感じがする。

しかし歴史という面では最も古い。横浜も神戸も幕末の開港後に開けたが、ここは江戸時代中期に中国との貿易のために海を埋め立ててできた。東西、南北約 250m の十字路は石畳で、中華料理店や中国雑貨など約 40 店舗が軒を並べている。

私たちは「老季」という有名店に入った。テレビや雑誌の取材履歴が一覧表で貼ってあり、その数があまりに多いので、もはや色紙などは飾っていない。

店員がお勧めという「生カラスミちゃんぽん」を迷わず注文する。初めて食べる生カラスミの味は、カラスミのあのクセのある味よりもクセがあり、そしてかなりしょっぱい。本来はチャンポンに混ぜて食べるというが、単独で食べた。クセになりそうな味だ。

一緒に注文した水餃子、春巻きも実に旨かった。長崎新地中華街は恐るべき。

■大浦天主堂

長崎の大浦地区、有名な「大浦天主堂」にやって来た。あの「4、変容・終わり」の発端になった教会だ。もちろん世界遺産に登録されており、国宝にも指定されている。

建てられたのは江戸時代末期の 1864 年で、この時はまだ禁教令は有効だった。ただし鎖国をやめて開港したので外国人の信仰の自由を認め、宣教師の来日を許可していた。

翌年に長崎の浦上地区にいた潜伏キリシタンたちがやってきて信仰の告白をした。当時のプティジャン神父は大喜びで本国に報告して、このニュースは「信徒発見」として世界中に広まった。ローマ法王も驚きそして喜んだという。



しかし信仰の自由が認められたのはあくまで外国人で、日本人の信仰は禁止されていた。明治維新直後も同じで明治政府は「切支丹邪宗門厳禁」という禁止令を出した。これによってむしろ弾圧が強化された。この弾圧を五島崩れ、浦上崩れなど〇〇崩れと呼ばれた。

私は当初、〇〇崩れとは禁教令が崩れていく意味と勘違いしていたが、今回の旅で隠れていた信仰が崩れた意味であることを知った。

しかし欧米諸国がこの弾圧を猛烈に抗議した結果、キリスト教を黙認することになった。明治政府がキリスト教を公式に認めたのは明治 32 年 1899 年だった。

<大浦天主堂>

この明治維新直後に出した禁止令という明治政府のとった政策について多くの人は釈然としない部分があると思うが、もう一つの流れを見るとある意味納得する。それは廃仏毀釈運動とそれに伴う神仏分離令で、明治政府は天皇中心の国家を創るために神道を重んじて仏教さえも邪魔者扱いした。それまでは神仏習合の考えで一緒にやってきたのに、神仏分離令は仏教界も対応に苦慮することになる。おっと少し話がそれた。

大浦天主堂と併設している羅典（らてん）博物館を見学する。この博物館は旧神学校と大司教館を博物館にしたもので、展示は潜伏キリシタン、それも弾圧や拷問の紹介が多い。

世界遺産登録の時代区分では「4、変容・終わり」だが、拷問や貧困でとても暗いものになっている。

ユネスコへの申請ではこの4の“終わり”の部分は多く触れていないが、最後の最後に明治政府が行った拷問が凄まじかったという記録が残っている。

12畳の牢屋に200人を詰め込んだという。その話を地元民は以下のように伝えている。

「あの牢屋に収監されていた人たちは、人としての扱いを受けておらんかったとですよ。狭かところに閉じ込められとって座ることもできんと、身体は隣におる人の圧力で持ち上がった状態だったとですよ。眠るときも、そのままの状態だったとですよ。食べるもんは、朝夕に一握りの芋が出るくらいだったとよね。みんな大小便もたれ流しになっとなって、疲労と飢えが原因で亡くなったとですよ。死体は5日間も放置されとって、腐ってうじ虫がわいてきたとですよ。これはもう、拷問以上の苦しみでしょう。もう可哀想で可哀想で……」。

■2つの世界遺産

羅典博物館の暗い展示を見てから、街に出て見ると街並みは明かくまるでヨーロッパのようだ。それはすぐ隣にお洒落なグラバー園があるからだろう。

グラバー園も世界遺産だ。ただこちらは「明治日本の産業革命遺産」としての登録になっている。このように違う登録の世界遺産が隣り合わせにある場所は極めて珍しい。

世界遺産検定2級の私にして日本ではここしか思い当たらない。それほどまでに長崎は歴史文化が入りこんでいる。



<長崎 大浦天主堂の前の街並み>

■被爆地

その長崎の歴史で忘れてはならないのが原爆投下で、浦上地区の浦上天主堂は爆心地に近いので原爆によって鐘楼の崩れ落ちた一部がそのままになっている姿を見ることができる。

右手を高く挙げて左手を横に出したあの平和記念像のある「平和記念公園」は、実は爆心地ではない。それは今回訪問して初めて知った事実で、爆心地は公園から少し離れている。

平和記念公園の場所には、かつて刑務所があって民間の土地ではないので公園にするのが容易だったのだろう。収監されていた囚人たちは全員が即死だったに違いない。刑務所の建物や塀の土台の跡が無残に残っている。

公園には各国から贈呈されて平和を祈るモニュメントがたくさんある。旧東ドイツ、チェコスロバキアなど今は無い国の名前もある。

長崎県は、遣唐使に始まってキリシタン、中華街や出島、原爆投下という歴史を持っている。つまり東洋、西洋、東洋、西洋との深い関りを繰り返してきた地域で、日本でも極めて珍しい。

そういう視点を持って長崎県、そして五島列島を旅すると非常に面白いかもしれない。

■長崎を離れて

佐賀県鹿島市の「祐徳稲荷神社」にやって来た。地元ガイドがついていないので添乗員がスマホで検索した説明文を読むだけだ。そのため紹介する内容に間違いがなく、かえって安心できる。

この神社は伏見稲荷大社、笠間稲荷神社とともに日本三大稲荷の一つというが、私は知らなかった。九州の神社では太宰府天満宮に次ぐ参拝客数で、かなり大きい神社だ。

大きさは私の予想を超えたレベルだった。大きな社殿と京都の清水寺のような舞台がある。舞台の大きさも清水寺と同じくらいで境内も広い。



< 祐徳稲荷神社 >

添乗員は「舞台まで多くの階段を登るのは自己責任で、後の行程に影響があるので時間厳守をお願いします。」と案内していたが、5分もかからず簡単に舞台にたどり着いた。

これはまた添乗員は分かっていないのだろうと思っていると、奥の院の標識が目にとまった。舞台まで簡単に登れたので時間が余っており、奥の院を目指すことにした。

奥の院は予想以上に遠くて高いところにあり、行けども行けども着かない。集合時間を考えると途中で引き返すしかないかと思った時ようやくたどり着いた。さすがに苦勞しただけあって絶景が広がっていた。遠くには海も見える。

参拝し急いで下山するが集合時間まであまり時間がない。何とかギリギリ30秒前にバスに戻った。ゆっくり見たかったが団体行動では致し方ない。それにしてももう少し正確な情報が欲しかった。

空港に向かうバスの中で、添乗員がいきなり「紙に名前を書いて下さい」と言って紙を配り始めた。配り終わってから名前の書かれた紙を回収して景品の抽選会をすると言っている。あまりにも唐突で皆は啞然としている。誰かが「景品は何？」と聞くと五島うどんだという。

GOTOが始まって私も最近は国内パックツアーに参加することが多くなって、このような抽選会も結構体験するが、これほど説明も盛り上がりもない抽選会は経験したことがない。抽選会は極めて事務的に始まり、そして事務的に終わった。

最後までこの添乗員には驚かせてもらった。対比からか地元ガイドはだれもが優秀で良い人だったことが印象的だ。

第四章 旅の記録

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

総合点（平均値）で5段階の75%、つまり3.75をオススメの目安としている。特に4.00を超えるには驚き感動が少なくとも1項目以上あるからオススメ度は高い。

五島コンカナ王国は、泉質4、風呂4、料理4、コスパ、サービス4、建物・部屋4、立地環境4、総合点4.00になった。宿泊費はツアー料金に含まれるので料金の詳細は分からないのでコスパは未評価にしたが、インターネットで調べるとそれなりの値段になっている。

鬼岳温泉の泉質はナトリウム・カルシウム・マグネシウム-塩化物泉（高張性中性低温）、pHは不明だが中性なので7前後だろう、湧出温度は25.4℃となっている。

■旅の記録

実施は2020年11月28日(土)～12月1日(火)の4日間、その行程を以下に示す。実際の行程と本文中の記述とは異なっている。

- ・1日目 朝自宅を出て羽田空港12時30分集合、ANA便にて15時20分佐賀国際空港着
17時に有徳稲荷、19時長崎ルークプラザホテル到着、中華街の「老李」で夕食
- ・2日目 9時30分ホテル出発、長崎平和公園、和泉屋、大浦天主堂とキリシタン博物館、
昼食にサンドイッチを購入して船に乗り込む
14時20分長崎港からジェット船で福江港へ、鏝瀬溶岩海岸、鬼岳展望台、
ホテル「五島コンカナ王国」到着、ホテル敷地内の五島ワイナリー見学
ホテル敷地内のレストランで夕食
- ・3日目 8時ホテルを出発、井持浦教会ルルド、大瀬崎断崖展望所、高浜ビーチ、
五島市「遣唐使ふるさと館」で昼食、13時30分福江港より海上タクシー乗船
久賀島の五輪港に寄港し旧五輪教会、奈留島の江上港に寄港し江上天主堂、
前島のトンボロを船上から見学、若松島の南端断崖に上陸しキリシタン洞窟上陸、
若松島の若松港に入港し若松大橋を渡り中通島に渡り、
「ホテルアオカ上五島」にチェックインし、割烹「扇寿」で夕食
- ・4日目 8時ホテルを出発、蛤浜、矢堅目の製塩所、青砂ヶ浦教会、坂本龍馬像
頭ヶ島天主堂、有川港の「麺'sまはさき」で昼食、鯨賓館、船で長崎港へ
17時に長崎空港到着、空港内で夕食、20時25分JAL便にて羽田空港へ
21時55分羽田空港到着、23時10分帰宅

総費用は2人で約16万円になった。これはGOTOの割引や地域クーポンを使用した結果の費用になっている。

- ・阪急交通社払い込み 157160円(2人分、GOTOの35%割引適用後の金額)
※GOTOの地域クーポン36000円分を入手

食事や飲み物の合計が約4万円になった。基本的にはGOTO地域クーポンが利用し、端数や利用できない店もあり実質の出費は約4000円になった。

- ・昼食(2回2人分) 約1000円(羽田空港、長崎市内でどちらもサンドイッチ)
- ・夕食(2回2人分) 約5000円(長崎中華街、長崎空港)
- ・土産物、飲み物等 約34000円